

第 332 回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2015 年 10 月 16 日(金) 17 時 30 分~19 時 00 分

場 所: 実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナールーム

演 者: 田中 芳彦 氏

(福岡歯科大学機能生物化学講座感染生物学分野・教授)

タイトル: 免疫細胞の分化と動きからみた口腔感染症の病態

歯周病に代表される口腔疾患は、歯の損失につながるため食生活や社会生活等に支障をきたし、全身の健康に影響を与えます。国民の多くがこのような口腔疾患に罹患しており、その患者数は歯周病 266 万人(厚生労働省 平成 23 年患者調査)と増加傾向にあり、社会的な関心が高まっています。歯周病をはじめとする口腔疾患は難治性の慢性感染症であり、特定の病原微生物が原因で発症し、免疫応答が病態に関与していることが示されています。近年、歯周病が糖尿病など全身の健康に影響を及ぼす疾患であることが明らかにされる一方で、全身での免疫応答がこのような口腔疾患に及ぼす影響についての理解は進んでいません。

口腔内には 700 種類を超える常在微生物が生息し、個体の中で最も多種多様な常在微生物叢を形成しています。例えば、歯周病は *Porphyromonas gingivalis* (*P. gingivalis*) に代表される歯周病原性菌によって引き起こされる歯周組織の感染症で、歯を失う最も大きな原因になっています。ヘルパー T 細胞を欠損したマウスでは歯周病感染に抵抗性であり、その病態に T 細胞による免疫応答が深く関与していることが明らかになっています。歯周病患者の口腔内局所にインターロイキン-17(IL-17)産生を特徴とする自己免疫疾患の発症との関与が指摘されるヘルパー T 細胞 Th17 が多く存在することが知られており、歯周病の病態が Th17 細胞による歯周組織の破壊によって論じられるようになってきました。

現在、免疫細胞の分化・遊走に焦点をおき、局所での感染が原因でおこる疾患と考えられてきた歯周病をはじめとする口腔感染症について、全身を介した免疫応答が疾患を制御するという視点から研究を展開しています。本講演では、われわれがとりにくんでいる口腔感染症における免疫応答の研究についてご紹介します。